

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組1】(A・B中学校)

・ハートフルウィークの実施

1、2年生全員を対象に、あらかじめアンケートで話したい教員を選んでもらい、教員との二者面談を行う。3年生が三者面談を実施する時期に並行して行った。担任にはなかなか話せないような相談や、生徒の現況など、把握したい内容を生徒から聞き取り、生徒指導に生かすことのできる情報を把握する機会となった。中には、そこで知り得た情報から効果的な支援につなげることができた生徒もいた。生徒にとって、安心して相談できる場の確保になった。

【取組2】(A・B中学校)

・SWPBS(スクールワイド・ポジティブ行動支援)に則った生徒会活動の実施

生徒会本部や委員会での活動方針を決める際、ポジティブな行動支援として、達成したい目標を提示し、キャンペーンを行う。できなかったことに着目するのではなく、できたことを褒めたり認め合ったりできるような仕組みを生徒会活動全体で実施した。

役員や委員の生徒が中心となり、全校生徒が取り組めることを伝えることで、それぞれに活躍の場を与え、生徒の所属感、達成感を高められるようにした。



【取組3】(C中学校)

・自己決定の場を提供するICT機器を活用した複線型授業の実施

全ての教科でICT機器を活用した複線型授業を行い、生徒が学び方を選択できるようにしたり、クラウド上で生徒一人一人の考えや意見を瞬時にクラスで共有したりするための仕組みを整えている。日々の授業で学習状況や興味・関心に応じて、生徒が自己決定をしながら学習に取り組めるようにしている。



【取組4】(C中学校)

・不登校支援についての校内研修

年度当初に管理職がSSR(校内教育支援センター)の運営方法や基本的な考え方等についての説明を全教員向けに行った。また9月には短時間の校内研修を実施し、不登校対応巡回教員が講師を務めた。不登校研修キットを活用した講義を行うことで教員の不登校についての理解を深め、SSR(校内教育支援センター)の運営方法や不登校支援について共通認識をもてるようにした。

多様な学びの場を確保する取組

（「早期支援」及び「長期化への対応」の取組）の推進

支援会議（A中学校）

管理職、各学年の教員、教育相談コーディネーター、特別支援教育コーディネーター、SC、SSW、SSR（校内教育支援センター）指導員、不登校対応巡回教員が参加している。各学年で特に気になる生徒を対象に支援策を話し合っている。SCやSSWの専門的な見解を参考にし、支援の方針を決めている。

アウトリーチによる支援（B中学校）

・SSW、登校サポーターとの連携
学校に登校できない生徒に対してSSWが家庭訪問を数回行う中で、登校サポーターの活用を提案し、保護者や生徒本人、登校サポーターを交えた会議を行って、定期的な登校支援につなげた。その後、週2回程度の登校支援を行うことで校内別室への登校ができた。

校内別室における支援（D中学校）

・個々のニーズに合わせた支援

今年度から正式に設置された校内別室では、ソファや観葉植物、一般的な生徒机とは異なる机や椅子が設置され、落ち着いた雰囲気のリAYOUTになっている。多様な生徒が在籍する中、自らすすんで学習することが難しい生徒には指導員が個別に学習支援した。運動が好きで運動をしたい生徒には体育館が空いている時間に軽運動を実施して、生徒が選択できるように工夫している。また、必要に応じて一人1台端末を使ってアプリ等を通して交流する時間も設けている。



デジタル機器を活用した支援（E中学校）

・生徒の希望に沿ったオンライン授業配信

オンライン授業を希望する生徒のクラスを教員間で周知し、そのクラスの授業をする担当教員はオンラインで配信しながら授業を行う。可能な限り教材や資料を画面でも共有し、生徒が分かりやすいようにしている。



関係機関との連携（E中学校）

・SSW、医療機関と連携した支援
感覚過敏等がある不登校生徒の支援方法について、SSWと相談しながら、医療機関の診断を仰ぎつつ、保護者とも連絡を取りながら慎重に支援方法を検討している。

成果

巡回担当校 5校で新たな不登校が生じないような取組を進めることができた。支援会議等の充実を図り、関係機関とつながっていない生徒を解消することができた。

課題

不登校生徒の学びの確保や、教職員間の学びの多様化に対する適切な共通認識をもって不登校支援や不登校の未然防止を一層進めていくことが課題である。